

『存在』

狂裂、狂奔裂。これもゆゆきの極みといふべきか。かくのごとく世が在るはこれゆえにあらむや。自由自在といふは自らに由りて他因を寄せず、自ら在る也。自らの為すところが自らの為すべきにありて、自らが在るといふことが自らの存在原因であるため、事実上、規範も制約もなく、定まりもなく、一切に於いて無制限に無制限である。かたちもない。かたがたがないといふかたちにもならない。いかなものに対峙しても違逆異叛しない。漏れなく、それら一切全てのそれぞれのものである。合致する。合致しないことにも合致し、合致しないといふことですらもある。合致し、かつ、合致しない。又は合致しない丈である。さように全てを網羅して餘すことなく、非全網羅であることを網羅し、非網羅のみであること丈であることであり、又は一部を網羅するのみであること丈である。何も否定しない。全肯定である。全否定丈である。又は一部否定丈である。又々は一部肯定丈である。矛盾なし。矛盾ですらある。かたちなきがゆえ、空であり、空に非ずして空すらをも絶つ。絶空である。違逆異叛にあらずといふことですらもない。

畢竟、誰もが識ることなり。それゆえ、誰も識ることができず、誰も知らぬことのできぬものなり。かたちなきゆえ。これ人の識るところに非ず。人の思惟に収まることなく、いかなる結も遂げず、いかなうな決定にも達することがない。思惟の中途のまま、未遂不収である。されば、さようなかたちにもならぬ。絶空を知ることなどできない。それが絶空を知るといふことである。知らぬ者とてない。草木も真菌も炭素も時空も無空も知っている、絶空を。或いは又、只、普通素朴に知ること、可。

そもそも、これらは論理的な思惟、及び現象観察に拠るが、我々のこのような現象観察は真を得ているか。諸々の概念は正鵠を得ているか。考概の道筋（論理的な思惟）は正しいか。え答へず侍りつ。得られようはずもない。それが獲得である。

一向わからぬ。我らの想像を絶するかたち・在り方の答であるかも知れない。たとえば、思惟のかたちではない答、経験知のような考概ではない知などなど、いや、さようなのは、まだまだ序の口。論考理解思惟諸々概念及び考概ならざる石庭枯山水の妙、身密口密意密の消息などそのうちか。寧ろ却って、路傍の石、棄てられしブリキの空き缶。単純素朴なる局所的事実ならむや。かくして、うつし世のことは今此れのごとく在るのであらむや。識らず。知りやうもなし。

又考概ならざると想へば。我のみがかく識るとても是である。草叢の道祖神として在るも是である。人は永遠に解脱し得ない。それが解脱である。それゆえに人は既に解脱してい

